

第5章 結論及び提言

5-1 結論

第3年次調査の調査の結果、結論は以下のように要約できる。本年次の調査の結果を、Table I-5-1 及び Table I-5-2 にまとめた。

(1) Mogoin gol 地区

本地区の地質は二疊記後期のアルカリ岩質火山岩類、三疊記後期からジュラ記前期の火山岩類、二疊紀から三疊紀の花崗岩類、ジュラ紀岩株、岩脈及び第四紀堆積物からなる。エルデネット鉱床には鉱床生成に関連したと考えられるエルデネット複合岩体の閃長花崗斑岩が分布する。本岩はアダカイト質深成岩であり、本地区においても同様のアダカイト質の閃緑岩及び流紋斑岩が分布する。地表部の変質帯はポーフイリー型銅鉱床上部に認められる高硫化系の変質帯が確認された。ここではエルデネット鉱床と同様の変質分帯が捕捉され、ポーフイリー型銅モリブデン鉱床が賦存する可能性が高く、鉱体は地表から相対的に深い深度に存在する可能性が高い。また、IP 法電気探査の結果、シャルチュールト山を中心に低比抵抗、高分極率及び高メタルファクターの重なる大規模な IP 異常を捕らえている。

これらのことから、第2年次及び第3年次に4本のボーリングを実施したが、黄鉄鉱を多量に伴う珪化凝灰岩が500m深部まで連続し、銅鉱化帯に着鉱することはできなかった。変質鉱物の分布状況からポーフイリー型銅モリブデン鉱床は地表からかなり深い深度に存在するものと考えられる。

本地区での探鉱を継続する必要はない。

(2) Zuukhiin gol 地区

本地区は第1年次の既存資料調査、地質調査及び空中磁気探査に基づき選定され、3年次の地質調査及び物理探査（TDIP 法電気探査）によって良好な結果を得ることが出来た。第1年次の地質調査では地表に孔雀石と黄銅鉱を含む銅の鉱化帯及び強い銅、鉛、亜鉛の岩石地化学異常を確認した。第3年次調査では本地区中央部に Cu 200ppm 以上の地化学異常が多く集中し分布することを確認した。また TDIP 法電気探査によって非常に高い IP 異常を取らえることができた。その結果、ボーリング調査を実施することになった。

花崗閃緑岩中の鉱化帯の銅品位は、MJME-Z1 孔で Cu 0.008%以下～0.784%、平均値 Cu 0.086%(コア長 492.00m)、MJME-Z2 孔で Cu 0.007%以下～0.678%、平均値 Cu 0.120%(コア長 494.65m)、MJME-Z3 孔で Cu 0.005%以下～0.455%、平均値 Cu 0.039%(コア長 496.30m)であった。銅品位は MJME-Z2 孔が最も高くなる傾向にある。また流体包有物の均質化温度及び塩濃度も高くなる傾向にある。

今後、本地区において物理探査精査（TDIP 法電気探査）及びボーリング調査によって鉱化

帯の南西方向への広がりを解明することが望まれる。

(3) Khujiriin gol 地区

本地区は第1年次の既存資料調査、地質調査及び空中磁気探査によって選定され、3年次に地質調査及び物理探査（TDIP 法電気探査）を実施した。第1年次の地質調査では孔雀石と黄銅鉱を含む石英脈鉱化帯が広範囲に分布することを確認し、また強い銅、鉛、亜鉛の岩石地化学異常を捕捉した。第3年次調査では本地区に Cu200ppm 以上の地化学異常が多く集中し分布することを確認した。また TDIP 法電気探査では非常に高い比抵抗域を確認し、そこには黄銅鉱、孔雀石及び藍銅鉱などを伴う石英脈がほぼ東西に発達する。

本地区において物理探査精査（TDIP 法電気探査）及び土壌地化学探査精査によって鉱化帯の西方向への広がりを解明することが望まれる。

(4) その他の地区

上記以外の調査対象地区では十分な探鉱が実施されており、探鉱を継続する必要はないものと考えられる。

5-2 将来への提言

地質調査、物理探査及びボーリング調査の結果から、将来への探鉱のために以下のことを提案する。

(1) Zuukhiin gol 地区

本地区では今後、物理探査（TDIP 法電気探査）及び地質調査によって詳細な解析を行い、ボーリング選定地域を絞り込み、本地区の銅鉱化作用の規模と品位を把握すべきである。

(2) Khujiriin gol 地区

物理探査精査（TDIP 法電気探査）及び土壌地化学探査精査によって詳細な解析を行い、本地区の地質及び鉱化作用を解明することが望まれる。